VI “PHEDRE”
ラシーヌと時代背景

村　島　実恵子

フランスの古典悲劇はコルネイユによって基礎を固められ、ラシーヌによって完成されたと言われている。

ラシーヌの悲劇に見られる特色はギリシャ美とキリスト教の背景、17世紀におけるルイ14世王朝の生活が浮き彫りにされている事である。又、フランス人の特性を巧みに描き出している。ラシーヌの時代は日本の近松門左衛門、井原西鶴、松尾芭蕉の時代とほぼ同じ頃になる。

ラシーヌは幼くして両親を亡くし彼と妹マリーは祖父母と一緒に生活する事になり、教会とPORT－ROYALの影響を受け始める。祖父の死後、祖母は娘アニエスをCHAMPASのPORT－ROYALに入れることに決めた。1649年の事である。

ラシーヌの叔母であるアニエスは13才年上でラシーヌや妹マリーの母親代わりの役目をしていた。1649年から1653年ラシーヌはPORT－ROYALの付属学校の生徒として過ごすことになった。CHAMPASやPARIS地方では生徒達は司祭と生活を共にしていたので、ラシーヌもキリスト教の雰囲気の中で過ごしている。中学、高校の教育法によって古典の泉にふれてゆく、それはラテン語とギリシア語による教育を受け、ギリシアの古典を暗記したと書いている。

PORT－ROYALの教育法は数人の生徒に一人の教師と云った小グループによる勉強法であった。そこでは生徒達は先ずフランス語を上手に書くように教育されていた。

ラシーヌは聖書、ローマ詩人ヴィルギリウスの詩、ギリシア作家の作品等も読まされていた。肉体と精神の根源をラシーヌはPORT－ROYALでしかも純粋なフランス語で教師達に教育された。

修辞学の教師は彼に文意法を教え、ラテン語学者、ギリシア語学者は彼を古代文化の精通者にならせた。人間の悲劇、信仰への導きである良心の指導者、人間の弱さ、又その崇高さをラシーヌは作中人物“PHEDRE”に於いて人物の心理描写として表現している。

1658年ラシーヌはPORT－ROYALを去ってパリで一年間哲学の勉強をした。パリではリーヌ公爵の秘書をしていた従兄弟のニコラ・ヴィタールに再会し社交界に紹介されPORT－ROYALの教育が与えなかったものを発見した。この社交界でラシーヌはラ・フォンテーヌと知り合いになった。

その頃ラシーヌはルイ14世の結婚に際し女王の為に韻詩を書いた。これは1660年に出版された。その韻詩は大変美しく詩的であり、戯曲にも出来るであろうと評された。文学者としての野心にかられたラシーヌは貴族達の厚遇を得ようとしてしばしば社交界に出入りし、ブルゴーニュ座等の役者達と知り合いになった。

1661年ラシーヌが書き上げた二つの戯曲「Amasie」と「Les Amours d'Ovid」はマレ座で上演する事を拒否され、失意のうちにパリを離れ、ユゼの司教代理をしている叔父スコナンの許で神学を学ぶ為に出かけた。

このプロヴァンス地方で昼間の光と夏の夜の素晴らしさを満喫し、ヴィルギリウスの詩を読み返し、再びギリシア悲劇の注釈をつけたり、聖書を学び、1663年リーヌ公爵のいるパリに戻った。その後一年間に彼は二つの韻詩を書き上げパリの社交界でサンタニアン伯爵と知り合い、次いでルイ14世に受け入れられるようになった。ラシーヌがモリエールと知り合ったのもこの頃であった。

1664年ラシーヌは「Thébaide」の初演をモリエール一座によって上演されたが余り成功しなかった。

1665年ラシーヌの新しい悲劇「Alexandre」が再びモリエール一座によって上演されたが余り好評ではなかった。ソフオクレスやセネカの「Phédre」に影響を受けてラシーヌもPhèdreを書き始めた。このテーマはラテン文学の中にも表われ、フランスでもこのテーマについてガルニエやプラドンの「Phédre」もラシーヌの作品と同じ頃出版されている。

ラシーヌはこの「Phèdre」を書くにあたってギリシアの悲劇作家エウリピデスの作品を範としている。王Theseの妃Phèdreは彼女の義理の息子Hippoliteに気持ちを寄せ死を選んだ。怒ったTheseは無実の息子を殺させ

るために人を赴かせた。

ラシーヌのフェードルは1677年1月パリでブルゴーニュ座で「フェードルとイポリット」の題で初演された。ラシーヌ38才の年で前作「イフィジェニィ」上演以来2年数ヶ月経過している。それと同じくして反ラシーヌのグループがジャック・プラドンに同名の悲劇「フェードル」を書かせ、ラシーヌの作品初演直後、ゲネゴー座で上演させ、この事をめぐって両者の間に激しいやりとりが続いた。このことでラシーヌは彼の作品「フェードル」を公にした後、創作の世界から遠ざかり、世俗的なテーマを扱った悲劇を書くことを断念したのである。

ラシーヌの「フェードル」は1654行の12音綴詩句からなり、語句の美しさは比類のないものとされている。この作品で使われた単語は1700種である事を考え合わせると言葉の持つ不思議な可能性を私達に理解させてくれる。

フェードルはエウリピデスに主題を仰いだギリシア悲劇であり、アリストテレスが悲劇の主人公に要求する燐爛と恐怖を誘うに相応しい内容である。フェードルは完全に有罪でも無罪でもなく、彼女自身がその宿命を忌まわしく思っている事でも分かる。ラシーヌの独創性はフェードルの夫テゼー王戦死の誤報がもたらせた事とイポリットがアリシ姫に想いを寄せている事である。フェードルが義理の息子イポリットに思いを打ち明けるのは、夫テゼーが戦死したと云う知らせ（誤報）を受けた後であり、フェードルの告白がこれによって正当化されるとは言えないが、フェードルの苦悩が観客の同情を強く引く契機になっている事である。フェードルはイポリットに熱烈な愛情を抱き乍ら、その事を誰にも言えず苦しみで衰弱してゆく。フェードルは自分の気持ちをはっきり示せないのでイポリットに反って辛く当たり、数知れぬ意地悪をなし、遂には国外追放迄しようとする。この気持ちを夫テゼーの外戦中乳母大に打ち明けるのである。忠義心の強い乳母はこの事をイポリットに知らせたのであった。この事を怒り、己を恥じたフェードルは死を企てたのである。この事を知ったテゼー王は息子を怒りのあまり、殺させようとした。アルテミの証言によってイポリットの無実を知り、父王テゼーの腕の中でイポリットは死んでいった。

ラシーヌはセネカが試みた以上に強くフェードルを前面に押し出している。中心人物であるフェードルを背徳の女性として描くのではなく、自己の感情を抑制し、苦悩の果てに身を滅ぼしてゆく宿命の女性を描こうとしている。

ラシーヌは異教徒であるフェードルをキリスト教徒に近いような人物として描き出している。フェードルが意識の力によって自分の感情を抑えようとしながら抗しきれない宿命によって破局に導かれていく筋はギリシア悲劇の骨格をなしている宿命と同意語になっている。

ラシーヌの時代背景

PORT－ROYAL

パリから南西50ｋｍ、シュブルーズの近くにあるポール・ロワイヤルは第四次十字軍の将校夫人が、夫の無事帰還を神に祈るために1204年に建立したベルナルダン会の修道院である。その修道院は回りの全ての視界をさえぎる丘の斜面の両側が切り立った谷間の窪地にあり、瞑想と祈りの為のその場所は、魂の純粋なあるがままの状態で祈る事の出来る所であった。

そこでは長い間、地位や経歴に関係なくシトー派の戒律に従う信仰深い女性たちを保護していた。中世の終わり頃から他の多くの修道会と同じ様に生活様式は世俗的になっていた。そこでは彼女達は低俗ではないが社交界の人々の様な生活をしていた。

修道院に囲いの塀はなく、希望として修道院に入り、又同様にそこから出て行く修道女達は気分転換の為に度々舞踏会を催していた。修道院附属司祭の指示の下で従者達が舞踏会の相手役をつとめていた。

このベルナルダン修道院では主祷文は翻訳されていなかった（ラテン語のまま）又図書室には宗教に関係する本としては聖務日課書しかおいていなかった。40年間で誓願修道女達は7回か8回しか説教を聞いていなかった。

修道院の入り口まで来て喜捨を乞う人も殆んどいなかった。或る日突然幼い７歳の少女が父親に連れられてやって来た。彼女の父はアンリ王の廷臣として仕え、6人の娘の養育にも不安を抱いていた。彼女の父親はこの修道院の補佐修道女の地位を娘の為に手にいれ、サン・シールと云う名を与えられていた。そのような事は当時の慣習のようなものであった。

修道院が建っていたその谷間は非常に非衛生的で、多くの修道女達が人生半ばで熱病のため世を去っていた。アンジェリック院長はこの事を神の意志として受容していたが心配もしていた。

修道院長は修道院の移転を決心してパリに向け出発した。アンジェリック院長の母は彼女にパリの近くのサン・ジャック道りにあるクラニイ館を買い

与えた。彼女はそれを取り壊し、そこに大きな修道院を建てた。そこをポール・ロワイヤルと名付けた。その建物は1814年以後は聖母病院となっている。今度は活動の中心を都市の中心に置き、改革された教団の影響は増大していった。ポール・ロワイヤルと云う語が流行語になったと云っても過言ではない。

ポール・ロワイヤルには信仰深い人達と見なされていた行政官、貴族、聖職者、僧服をまとった修道士達が祈るために集まって来た。このようにポール・ロワイヤルは1630年頃にはトラントの公会議の崇高な精神に従い、同じ様に改革されていった他の多くの修道院の模範となっていた。多くのキリスト信者の目に、修道女の制服は憧れとなっていた。

その修道服は改革されたキリスト教の象徴とみなされ、完全な輝きに見えた。教義の逸脱の問題や少数の異端者や反抗している人々の事もまだ明確にはなっていなかった。アンジェリック修道院長と修道女達に教会の迫害により死の苦しみを受ける危機が迫って来ていたのである。

AUGUSTINUS

神の恩寵についての問題を公に論じることを禁じていたローマ法王庁の命令に違反していたアウグスティニュス会が1640年ルヴァンに創立された。それ迄は非公式に印刷物を出版していた。イエズス会はその印刷物を何とか入手して、その出版を禁ずる事をローマに知らせるように教皇特使に依頼していた。

大きな二折判の本は、使用の特権を与えられていた出版物でスペインの枢機卿やベルギーの総督に献呈されていた。やがてその本はヨーロッパ各地で読まれるようになった。そして九月にはフランクホールの見本市で販売されるようになった。オランダのカルヴァン主義派は賛成の意思表示をしていた。即ち、CORNELIUS・JANSENIUS の語字 CALVINI・SENSUS・IN・ORE と云う字句に置きかえたのである。

フランス国内に於いてはその多くの著作物が翌年パリで次いでルアンで再販されていた。ラテン語で書かれたその本が多く読まれると云う事にも驚かされるのであるが、雑な装丁のその本は現代からみるとがっかりさせられるようなものである。熱狂的なキリスト者達が私的に出版をする際にはもっと外観にこだわっていたからである。

聖シランは予言者的な表現で「最新の信仰の本」、「教会と同じように続い

ている本」又「王とローマ法王がそれを崩壊させようと力を合わせたとしてもうまく行かないように出来ている本」。

アウグスティヌス会を理解させる教義は一体何であろうか。その事を理解する為には教会に於いて議論された報告書を読む以外にはない。故にヤンセンの意志は偏屈的なものを調和させ、議論を終結させる解決案をはっきりと表明していた。カトリック教徒の信仰の根源は原罪によって裁かれた人類は神の助けなしには救われないと云う事である。即ち恩寵、神の助けにより救われる為には自己自身が努力していかなければならないと云う人間の自由を尊重している。この二つの救いの道は一致するのであろうか、困難なことである。神の恩寵を過度に認めることは、人間の自由を亡ぼすことにならないだろうか、自由を賛美することは神に対し、その役割や支配力を拒否する事にならないだろうか。幾世紀もの間、教義の逸脱が一つの方向から他の方向へと移行していったのである。

ラシーヌの遺言

父と子の聖霊の御名において

私の死後、遺体はChampsのポール・ロワイヤルに運んで、M・HAMONの墓地の傍らの墓所に埋葬されるように望んでいる。私のこれ迄の人生で行って来た愚かしい行為や、かつてはこの教会で受けた崇高な教育を私の人生の中で充分に生かせ得なかったこと、私の心の中に畏敬の念が余り持てなかったこと、悔俊の情薄く、立派な模範にもなり得ず、人に敬愛される資格に欠けていた事を認めます。私の霊魂の安息を修道院長、修道女の方々によろしくお取り次ぎをお願いします。又これまで神に背いて生きてきた私の為に御寛容を得るようにお祈りをお願いします。

私の死後、私が整理していた800冊の本を受理して下さいますよう修道院長にお願いします。この書面は1698年10月10日、パリの私の書斎で書いたものです。

何故なら、ポール・ロワイヤルに対する迫害は、外部からはまだ何も最終的な段階にはなっていなかったのである。1709年修道女達が退去したのち、1710年に修道院の全ては大砲によって破壊されてしまった。聖ランベール教団の墓地から幸運にも家族によって掘り出される迄遺体は地下にひっそりと

安置されていた。

ラシーヌの未亡人はモンのサンタチエンヌの教区に住んでいた。ラシーヌ夫人は教区に抗議をして1711年12月日の夜、パリ管区の厳しい管理下で、夫ラシーヌの遺体を探す為にやって来た。

モンのサンタチエンヌの墓地にはラシーヌの遺灰のほかパスカルの遺灰も収められている。

参考文献

Racine : phèdre
F.Mauriac : Vie de Racine
P.Crouzet : Tout Racine
CH.Dedeyan : Racine et sa phedre.